

紀要第三号に寄せて

学長 榎 智 雄

われわれ白梅学園短期大学の教職にあるものは、学生の教育を担当しつつ、学問の研鑽に従い、学園の輝かしい将来に、希望を懸けて努力している。この教員同人は研究の成果を紀要に寄せ、今年はその第三輯を刊行するに至った。各人は多くは専門専攻を異にし、執筆する課題は学問系列を必ずしも一にしない。従って紀要編集の組立ても、その内容は多彩である。この意味では、この紀要は学問上の専門雑誌とは、やや類を異にするかも知れないが、これは、かえって白梅短期大学の一体としての特色を発揮しているのではあるまいか。

われわれは日頃、教養を口にし、知識知見の広きを尊び、これを教育の大切な要因としている。しかし、他面において、われわれは教育における学問の専攻を尊重するものである。だが、子女子弟を育成する者にとって、ただ一筋に一能一芸に精進させるだけで事足りるとするであろうか。教育のあるところ、教養と専門の均衡の論議は、常にその兼ね合いについてであるが、双方の大切なことには変りはない。専門にだけ偏すれば視野の狭くなることは免れないし、また教養だけに傾けば、学問や職業にまともりがつかないきらいがある。比重については、いろいろ見解があろうが、双方を適当に

教育という容器に盛るのがその要諦であろう。

もし、この教育構想の内容を、一教育機関が総合的に表明しようとすれば、それはわれわれの発刊する紀要のごときものではあるまいか。この紀要の編集するところは、個々には専門でありながら、全体には教養を兼ねる大きな意義のあるのを感じずにはいられない。人はその人情として、あるいは、一般知識への当然の欲求として、狭い囲いの中に満足するものではない。時には隣家の庭園を垣根越しに窺いたくなるものである。学問もまたその本質から見ると、あだかも、地理的の辺土に特別の発見があるように、学問が他の分野と交流する辺境にも、すばらしい開拓の郷土が待っている。こんなところにも、この紀要の使命があると思われる。

また仮りに、この紀要がなかったとしよう。学園内は互いに知り合う共通の手段を欠いて、灯火のない闇に等しいであろう。同僚は互いの研究に疎く、その協力は数頭立ての牽馬に似て、有無相通する有機的の協力は、これを望むことは出来ない。また、発表の機関雑誌なくして、研究の成果も乏しかろうし、学問的志気も揚がらぬであろう。また、この紀要を手にする学生のことを思えば、かれらはこれによって、学園の学問的陣容を知り、師表に対する親しみと敬愛の念を深めることであろう。以上記して思えば、わが紀要の第三号の刊行を喜ばずにはいられない。この一巻のために、多くの時間をさかれ、執筆された諸賢の労に対して、心からの敬意と感謝を呈したい。